



AET1 and AET2
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB and Part II

Wednesday 8 June 2022 13.30-16.30

Paper J5

Modern Japanese texts 2

Answer **all** sections.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

Section A

(1) Translate the following **unseen** text into **English** [35 marks].

悲観論は人を賢く見せる。

現状を嘆き、社会を批判し、絶望を語ると、すぐに称賛の声が集まる。テレビや新聞、SNSを見渡しても、大量の悲観論が溢れている。「日本はもうダメだ」「世の中は悪くなるばかり」といった具合だ。

一方で楽観論には逆風が吹いている。この危機の時代において、「何とかなるよ」「大した心配はない」といった物言いは、どこか間抜けで、馬鹿らしく響いてしまう。

確かに、世界は順風満帆ではない。まだ新型コロナウイルスの完全終息は見えないし、その経済的損失も計り知れない。加えて日本には少子高齢化という喫緊の社会課題もある。安全保障やエネルギー分野でも問題は山積している。

根拠なき楽観論に批判が集まるのは当然だ。全てが精神論で乗り切れるほど、世界は優しく設計されていない。

では、ただ現実を受け入れ、嘆いていればいいのか。

かつて政治学者の丸山眞男は、「現実だから仕方ない」という発想を批判した。この国では「現実」という言葉が、変えることができない既成事実として捉えられがちだというのだ。

戦争も仕方ない。敗戦も仕方ない。民主主義も仕方ない。そんな風に、全てを「仕方ない」という態度で受け入れてしまっていないのか（『現代政治の思想と行動』）。

しばしば悲観論は、この「現実主義の陥穽」に陥ってしまう。悲観や批判は、それだけで「何かを言った風」になるからだ。

実のところ、悲観論は往々にして根拠が薄弱だ。「1970年代には大飢饉が起こり数億人が餓死する」「1980年代には核戦争が起こるだろう」

「20世紀中に石油は枯渇してしまう」。

かつて流行した専門家による未来予測だが、その全てが見事に外れている。

2020年にも、「国内で約42万人が新型コロナウイルスで死亡する」「感染爆発によって、日本もニューヨークのようになる」といった悲観論が

(TURN OVER)

話題になった。

人々が直感的に抱く恐怖と悲観論は相性がいいのだろう。まるで、観れば嫌な気持ちになることがわかっているホラー映画を楽しむように、悲観論に飛びつく人は多い。

人間にとって、先が見えないことは大きな不安だ。そのような「どうしたらいいかわからない」という状態なら、悲観論のほうがマシに見えるのだろう。少なくとも悲観論は、現実が悲惨な理由を、説明だけはしてくれる。

しかし必ずしも現実とは所与のものではない。本当は別の「現実」を作っていくこともできる。

もちろん、現実を変えるのは難しい。そんな時には、全てを「仕方ない」とあきらめてしまう前に、まずは自分自身や、自分の周囲を楽観的に捉えてみるのがいい。

FURUICHI NORITOSHI, *Rakkanron* (Shinchōsha, 2021) pp.6-8.

Vocabulary (Question 1)

悲観論	pessimism
嘆く	to deplore, lament
絶望	despair
称賛	praise
溢れる	to overflow
間抜け	foolish
順風満帆	plain sailing
喫緊	urgent
眞男	Masao (name)
既成事実	established fact
陥穽	trap
飢饉	famine
餓死	starve (to death)
枯渇	run dry
マシ	better
所与	given, the given...

(TURN OVER)

Section B

(2) Read the **unseen** text carefully and answer the following questions in **English** in as much detail as you can (take content from the text only) [35 marks].

▶ 近代家族の一般化

車のCMは、どのメーカーも家族をテーマとしたものが多い。夫婦と子どもが車でレジャーに出かけ、子どもに新しい体験をさせたり、自然に親しんだり。帰り道、子どもとお母さんは疲れて寝入ってしまう、彼・彼女らに温かいまなざしを向けつつ、車の運転をするお父さん。

「家族」というときのイメージはこのようなものではないだろうか。

たぶん、お父さんはサラリーマンかなにかで普段は忙しく家族との時間を持ってないが、ここぞというとき、たとえば、子どものしつけや「家族サービス」ではきちんと「父親」をする。お母さんは、家にいて家事や育児のほとんどを行い（あるいは最近はそのかたわら仕事もし）、家族の日常生活をサポートする。子どもは幼稚園や学校に行ったり友だちと遊んだりして「遊びが仕事」（あるいは最近は勉強も）の（子ども時間）を過ごす。

このような家族は近代社会の到来とともに成立したため、近代家族と呼ばれている。日本で近代家族

Question 2 continues...

が多数派を占めるようになったのは、高度経済成長期のころと言われている。それまでも、夫が官吏やサラリーマンを職業とし妻が専業主婦という家庭が生まれていたが、それは一部にすぎず、多くの家庭は農業や自営を生業としていたので、女性も農家の嫁、あるいは商家のおかみさんとして働いていた。また子どもも農作業やきょうだいの子守といった働き手としての役割を担っており、遊んだり勉強したりするだけの存在ではなかった。第二次世界大戦後、経済構造の中心が第一次産業から第二次・第三次産業へと移行するなかで、男性の多くがサラリーマンとなり、その妻たちは専業主婦となったのである。また、子どもたちは大人たちが働くかたわらで世話され、ある年齢になれば働くことが求められる立場から、もっぱら、家庭で母親を中心に世話され学校で教育される存在となった。

結婚がどのようなきっかけによってもたらされるかについても大きな変化があった。

戦前は、階層にもよるが、家制度のもと、結婚は親の意向や家同士の結びつきで決定されることが多かった。戦後は当事者の合意によることが可能となったものの、一九六〇年代前半までは見合い結婚がほとんどであり、結婚適齢期の若者たちは、親戚や職場など周囲の年長者の世話によって結婚することが多かった。やがて、恋愛結婚が多数派を占めるようになる。当時は、初婚年齢が低く（おおむね男性が二六～二七歳、女性二三～二五歳）、生涯未婚率（五〇歳時点の未婚率）も低く、ほとんどの人が若い年齢で結婚する皆結婚社会であった。

ただし、女性が適齢期に結婚しなければならないという風潮が根強かったこともつけくわえておかなければならない。結婚や育児を経て女性が続けられる、農業や自営業以外の職業の選択肢は現在よりも限ら

(TURN OVER)